博 士 学 位 論 文

－論文要旨および審査結果の要旨－

第 １４ 号

武蔵野音楽大学

はしがき

本編は学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条の規定による公表を目的として、令和２年度に本学において博士（音楽）の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

目　　次

学位記番号	学位の種類	氏　名	論文題目	頁
博甲第23号	博士(音楽)	前 田 領 愛	パーシケッティによる音楽語法の研究 ── 4曲の弦楽四重奏曲を 考察対象として ──	1

氏　　名	前田領愛（まえだ えりあ）
学位の種類	博士(音楽)
学位記番号	博甲第23号
学位授与日	令和3年8月5日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
学位論文題目	パーシケッティによる音楽語法の研究 ── 4曲の弦楽四重奏曲を考察対象として ──
論文審査委員	主査　教　授　深　山　尚　久
	副査　教　授　野　崎　勇喜夫
	副査　特任教授　寺　本　まり子
	副査　講　師　丸　山　由里子
	副査　白　石　美　雪 （武蔵野美術大学造形学部教授）

論　文　要　旨

本論文は、ヴィンセント・ラドウィグ・パーシケッティ Vincent Ludwig Persichetti (1915-1987)の４曲の弦楽四重奏曲を考察対象として、その音楽語法について考察し、これまで漠然としか捉えられていなかった作風の変化と、ほとんど研究されていない後期作品の語法を明らかにするものである。

パーシケッティは多作家で、作品番号は 167 まで存在し、独奏作品から管弦楽曲、吹奏楽作品、宗教作品など、幅広いジャンルに及ぶ。

吹奏楽のための作品は作曲者の生前から演奏機会が多かったのに対し、それ以外の作品は必ずしも演奏機会が多いとは言えず、特に弦楽器のための作品については非常に少ない。

弦楽器のための作品は、規模の大きいものから、４曲の弦楽四重奏曲、単一楽章でありながら多楽章形式を内包した《弦楽のための交響曲》Op.61(1953)、ピアノ五重奏曲 Op.66(1954)といった作品が挙げられる。小規模な作品には、無伴奏ヴァイオリン・ソナタ Op.10 (1940)、《セレナーデ第４番》Op.28 (1945)、《仮面 Masques》Op.99 (1965)、ヴィオラとピアノのための《海辺の王女 Infanta Marina》Op.83(1960)がある。このほかにヴィオラやコントラバスのための無伴奏作品が後期に書かれている。

彼の作品の特徴は、例えば調性音楽と無調音楽のような、性質の異なる様式をひとつの作品の中で組み合わせることである。それは生涯を通して変わらなかったため、「生涯において作風は進化しなかった」という意見もある (Patterson 1988: 12)。またほとんどの先行研究において、彼の作品は概説的に分析されるのみであり、また彼自身の著作『20 世紀の和声法』や、彼の妻ドロシー・パーシケッティ Dorothea Persichetti (1919-1987)によ

る専攻論文における記述は、実際の作品の中での検証が困難である。また彼の生涯の後半の作品は、多くの場合研究そのものがなされず、作品構造の詳細については、明らかになっていない点が多い。

本論文は序章を含めた全４章と結論から成る。

先行研究、パーシケッティの生涯の概観、そして彼の４曲の弦楽四重奏曲の概要を述べた序章に続いて、第１章では弦楽四重奏曲第１番 Op.7 と第２番 Op.24 の分析を行った。第１番は 1939 年に作曲され、内容として習作的なものが多い。その５年後の 1944 年に作曲された第２番は、楽曲全体が全音階による構造で成り立っているため、楽曲の理解が容易であり、「４曲の中では演奏機会が最も多い」と述べている文献もある(Simmons 2011: 286)。

第２章では弦楽四重奏曲第３番 Op.81 を分析した。1959 年に作曲されたこの作品では、12 音技法が用いられている。楽曲内で使用される複数の音列は、様々な手法で組み合わされている。また、ある音を軸にそこから等距離の音程を上と下で奏することで、独特の音響構造を作り出す「投影書法」という書法も見られた。

第３章で取り上げた 1972 年作曲の弦楽四重奏曲第４番《パラブルＸ(No.10)》Op.122 では、彼自身がそれまでに完成させた作品から複数を選び、それらの素材を借用し、ひとつの作品の中でまとめ上げることを試みている。本章では、借用された素材の詳細、素材の変形方法、本作品の中での用い方を中心に分析を行った。

このように、先行研究ではほとんどなされていなかった弦楽四重奏曲および後期作品に関する本研究は、これまで明らかにされていなかったパーシケッティの書法や楽曲構造の一側面を解き明かすものであると位置付けることができる。

本論文の考察を経て、筆者はパーシケッティの作風の変遷のひとつの道筋を結論付けた。1939 年の第１番と 1944 年の第２番は、個人的な語法を求めた探索的な段階であり、1959 年の第３番では調性音楽の様式と無調音楽の様式を共存させることで、彼独自の様式の多様さが確立されている。そして 1972 年の第４番《パラブルＸ(No.10)》ではさらなる探索の段階として、音列技法を含めた様々な手法を用いて、あらゆる作品をひとつの作品の中で統合することが目指されている。

彼のほぼ全生涯にわたる４曲の弦楽四重奏曲に対する本研究によって、各曲の具体的な構造が明らかになっただけではなく、各々の弦楽四重奏曲と同時期の作品にも同じ特徴が指摘出来た。それによって、４曲の弦楽四重奏曲を中心として、そこから彼の他の作品へと視野を広げてゆくという捉え方が可能であることを示すことができた。

論文審査結果の要旨

執筆者の学位申請論文は、ヴィンセント・パーシケッティVincent Ludwig Persichetti(1915-1987)の４曲の弦楽四重奏を研究対象として、これまでの様々な資料が不十分であるところに着目し、結論付けが不明瞭である後期作品の語法を明らかにすることを目的とした。

この研究を対象に取り上げた動機として、執筆者はパーシケッティも多数残している吹奏楽に親しみがあり、大学院ではアメリカの作曲家の作品を演奏してきた。その作曲家の中で、先行研究の少ないパーシケッティに絞り、弦楽四重奏の４曲を研究対象とすることにしたものである。

本論文は膨大な量の英語の先行研究を読みこなし、楽譜、スケッチの資料調査も丁寧で、楽譜については一時資料である作曲家の自筆譜やスケッチを、Newyork Public Library から取り寄せて底本とし、分析を行い独自性のある論文であり高く評価される。

特に弦楽四重奏第３番、第４番における語法の観察や分析に関し、第３番においては音列の組み替えによる楽曲の構造を明らかにした点、第４番においては底本とした２つの資料の仔細な解読を基とし、使用される音形や他の作品との関連について多くの指摘を含んだ点は以降のパーシケッティ研究に大きな影響を与えるものと考えられる。

逆に指摘される点として、先に存在している書法にもかかわらずパーシケッティが用いたことを「極めて個性的」と彼と同時代の作曲家の作品に対して十分な知識がないことからくる個別の評言の不正確さが気になったこと、作曲時の他の文化の情勢、それとの関わり、前後の作品との関係性などにも必要最小限、より多く触れていくこと、筆者がヴァイオリニストである立場から弦楽器書法や奏法の変遷へのアプローチを感じさせて欲しかったことなどが挙げられる。

しかし、予備審査以降、全般的な構成の修正などが行われ、序章の先行研究の重要度や本論文における主要な参考文献についての説明、第１章以降の分析内での譜例や説明の削除、加筆による整合性や論点の明確さなどについて改善を認めることができた。
また、本論文における作品のオリジナルな分析により、作風の変遷の一つの道筋が明らかになり、パーシケッティが目指す更なる探索の段階が示された。これは、この研究が彼の音楽語法の一側面を明らかにしたことによるものと確認できるものである。

従って、論文自体の内容の完成度、新たな視野を掲げた独自性のあるものとして、課程博士の学位を授与するに値する水準には十分に達している論文であると判断するものである。

ヴァイオリン：令和 2 年 11 月 14 日

演奏審査委員

氏　　名	前田　領愛（まえだ　えりあ）
学位の種類	博士(音楽)
学位記番号	博甲第23号
学位授与日	令和3年8月5日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項
演奏曲目	W.シューマン：ヴァイオリン協奏曲(1959年最終稿) William Schuman : Violin Concerto(1959 Final Version) V.パーシケッティ：無伴奏ヴァイオリン ソナタ作品10 Vincent Persichetti : Sonata for Solo Violin Op.10 D.ズベイ：ヴァイオリンとピアノのためのカプリッチョ David Dzubay : Capriccio for Violin and Piano
演奏審査委員	主査　教授　深山　尚久 副査　教授　ツォルト・ティバイ 〃　特任准教授　黄原　亮司 〃　講師　山中　光 〃　講師　増田　加寿子 〃　講師　木野　雅之 〃　講師　柴　香苗 〃　講師　安冨　洋 〃　講師　渡邉　信一郎 〃　講師　花崎　薫 〃　講師　山﨑　みのり

演奏審査結果の要旨

演奏曲目

W.シューマン William Schuman	ヴァイオリン協奏曲(1959年最終稿) Violin Concerto(1959 Final Version)
V.パーシケッティ Vincent Persichetti	無伴奏ヴァイオリン ソナタ 作品10 Sonata for Solo Violin Op.10
D.ズベイ David Dzubay	ヴァイオリンとピアノのためのカプリッチョ Capriccio for Violin and Piano

全体に渡って良く弾き込まれており、このコンサートにかける意気込みが感じられる集中力の高い演奏だった。概ね好評であった。
以下、曲毎の所見として

W・シューマン：ヴァイオリン協奏曲

当作曲家の心情を音の捉え方等から良く表現されていて、曲の魅力を感じることが出来る好演であった。第一楽章、音質の安定感が優れており、ボウコントロールの巧みさがアルペジオ音形の美しさにも良く表れている。ピアノとのバランスも絶妙だった。ダブルストップの音程感も非常に安定していた。第二楽章、徐々に会場の響きに順応していき作品の特徴を落ち着いて表現していた。速いパッセージも技巧に走らず丁寧に仕上げてあった。その上でコーダから終わりにかけてのストレッタ的な追い込みは緊張感のある演奏だった。

パーシケッティ：無伴奏ヴァイオリンソナタ op.10

各々の楽章が持つキャラクターがしっかりと表現されておりとても楽しめた。ピッツィカートのバランスもとても良かった。無伴奏での間の取り方をこの会場に合わせることを意識することで、より音の拡がりが増えたのではないかと、感じられた。第三楽章 vivo の軽妙さは見事であった。

D.ズベイ：ヴァイオリンとピアノのためのカプリッチョ

後半になり、会場における楽器の響きがより良くなった上で、この作品の特色が良く表現されていた。現代音楽でありながら聴きやすい作品に仕上げられていた。これはピアニストの技量も素晴らしく、バランスも完璧で、二人のアンサンブル能力の質の高さに裏打ちされた結果である。

プログラムノートの内容の深さも大変質の高いもので、尚且つわかりやすいものであった。それぞれの曲が非常に弾き込んであり個々の個性を捉えながら完成度の高い演奏であった。今後、より感情の発露を多く、エモーショナルな音色の変化を実現していくことによって、アメリカ近代の魅力を伝えて行くプレイヤーとしても、更なる活躍を期待したい。

博士学位論文　論文要旨および審査結果の要旨（ 第 14 号 ）

令和 3 年 10 月 19 日発行

発　行　武蔵野音楽大学大学院
編　集　武蔵野音楽大学学務部
〒176-8521　東京都練馬区羽沢 1-13-1
電話 03-3992-1128